

# 私の仕事 この一年

## 京都府立東舞鶴高等学校

谷口未妃

「先生、光ってさわられるん？」

「月にうさぎがいるって本当？」

私が平成27年度4月から勤務している高校の図書館で、生徒たちから聞いた言葉です。

ひとつめは夏休みに来ていたやんちゃな生徒のうちのひとりが呟いたもの。補講の合間に暇を持って余してやって来ては、図書館で騒いだり椅子を並べてお昼寝したりと好き放題に行動され、司書として試練のような時間を過ごしていたときのことで。彼がふと呟いたのは、川上未映子の小説「すべて真夜中の恋人たち」で語られる、主人公の女性が恋する相手へ発した一言そのままなのでした。そもそも恋愛小説なんて読んだこともないらしいのです。その言葉が小説の中で語られたこと、どんなふうに相手が答えたかということをお伝えしました。それを聞いた時の無関心な態度と、すこし照れくさそうな表情を覚えています。

ふたつめはスーパームーンが見られるという夜のことで、図書館を閉めようとしていたときに生徒が月を見ようと誘い出してくれたのです。高校2年生にこんな可愛い質問をされるとは思いもよりませんでした。うさぎがお餅つくとかよく言うやろ」と真剣な顔で聞いてきます。月で本物のふわふわのうさぎがお餅をついているわけではないけれど、月にうさぎはいるのだということ、ちょうど図書館に展示された月についての本を見せて説明すると、月の模様の解釈が地域によって異なることに興味を示していたようです。

公共図書館、私立女子中学高等学校図書館勤務を経て、私が今立っているところは、地域、校種、立場、何もかもが異なる世界です。どんな生徒たちがやって来るのか全く想像もできず身構えていましたが、着任してすぐ、東舞鶴高校の生徒は人懐っこいのだと教えられました。確かに、少し声をかけてあげるとすぐ心を開いてくれます。認められたり、褒められたりしたことのない子が多いとも聞きました。好意を示してくれる子ばかりではなく、負の感情をぶつけてくる子もいます。懐いて言うことを聞いてくれるのではなく、単純に距離が近いのです。

そんな生徒たちとの何気ないやりとりに、学校図書館司書の存在意義のようなものを感じています。あまり学力が高いとは言えない学校で、なかなか自ら興味をもって学ぶという姿勢をとれない子が多くいます。そんな中、人懐っこさだけは人一倍である生徒たちのこういった小さな心の動きを逃さずに、司書としてできるやり方で何かを示してあげることが、この高校で私にできることなのかもしれないと思っています。

「未妃は太陽に嫌われてる」

これは図書館常連の生徒の一言です。このように、すぐに幼稚な意地悪を言ってみ下してくるうえに、名前を呼び捨てで呼ばれるので何度も注意しているのですが、この一言だけは純文学的表現だなど思ったので記憶に残っています。本はそっちのけで、私に向かって3時間話し続けることもある子です。とにかく話を聞いてほしいという生徒が多いようです。タイミングが重なれば、複数の生徒が同時に違う話題を話しかけてくることもあり、くたくたになったことがあります。クラスや家庭や日々の生活のいろいろな不満を、ここで発散しているのかなと思います。図書館を居場所として認識してくれているようなので、そういう場所がひとつでもあればこれから変わっていくのかなと、卒業まで長い目で見てあげようと思っています。

こうして振り返ってみると、着任した頃は図書館利用が少なく、様々な機会でも声をかけたり顔を合わせたりした生徒が、徐々に図書館利用者になっていったのでした。そして、司書と生徒の間にできた空間のようなものが、そのまま図書館をつくっていくことに気づきました。学

校図書館というのはずっと続いていくものだけれど、生徒たちは1年ごとに成長していき、3年間を過ごしたのちに卒業してしまう。そのわずかな時間にしか存在しない図書館があるのだと知りました。

4月までは、読書推進や授業支援に奮闘する自分を思い描いていました。実際は、直接生徒と向き合っている時間が、想像していたよりずっと多いような気がします。こんなにていねいにひとりひとりの生徒を見られることに驚きながらも、幸せなことだと感じます。

まだまだ課題は多くあります。この1年間で築き上げた図書館を、次のステップへ繋げなくてはなりません。授業利用も少なく、学校図書館として機能しきれていないという実感もあります。心配や焦りもありますが、親切で素敵な先生方に囲まれ、日々楽しく声をかけてくれる生徒たちがいる図書館に携われることを、本当にありがたく思っています。東舞鶴高等学校で、私にしかつくることのできない図書館が素晴らしい場所となるよう力を尽くし、司書としてみます成長できるよう励みます。

## 東京都立中央図書館

西 口 真梨奈

司書の仕事をしてから、あっという間に1年が経とうとしています。今回は、私の仕事内容に加え、日々感じていることを皆様にお伝えできればと思っています。

私が配属されたのは、東京都立図書館の中でも、港区にある「中央図書館」です。その中でも、「サービス部情報サービス課調査支援第二係」という部署です。その名の通り、利用者へのサービス提供を主な業務としている部署です。中でも、調査支援第二係は社会科学、自然科学を担当しています。特に、重点情報サービスと呼ばれる「ビジネス情報」「法律情報」「健康医療情報」には、かなり力を入れており、専門のコーナーを設けています。

調査支援第二係としてのメインの業務は「レファレンス」と「イベント」の二つです。

一つ目のレファレンスは、司書としての力量が一番試される業務です。都立中央図書館では、カウンター、電話、メールの3つでレファレンスを受け付けています。カウンターや電話では、「1990年代の〇〇区の住宅地図が見たい」といったシンプルな質問が多く寄せられます。一方、メールレファレンスでは1週間の回答期限を設けて、利用者からの質問に答えています。そのため、大量の資料を当たらなければわからないような複雑な質問が多く寄せられます。「夏目漱石が働いていた大学の1コマは何時間か」など、回答すら出ない質問も多く寄せられます。そして、一日がレファレンスで終わってしまうような日もあるくらいです。

二つ目のイベントは、私の所属している調査支援第二係ならではの言い方も良いでしょう。「ビジネス情報」「法律情報」「健康医療情報」は、本を集めるだけでなく、講演会を頻繁に行っています。通称「イベント係」なんて呼ばれてしまうほど、調査支援第二係はイベントが盛りだくさんの係です。私は「ビジネス情報」「法律情報」を担当しているのですが、平成27年度には「就職活動セミナー」「法律講演会」「起業相談会」「ビジネス講演会」の実施に関わりました。加えて、他の図書館職員向けの「レファレンス研修」の実施にも関わりました。講師を選んだり、チラシを発注したり、ホームページを作成したり、他の機関にイベントのポスターを持って行って掲示してもらったり、さまざま作業がイベント実施日までもありました。

このように、慌ただしい日々を過ごしてきました。その中で感じたのは「自分一人で完結する仕事は一つもない」ということです。

イベントの実施に関しては、外部の講師、印刷業者等、多くの人の協力がないと実施できるものではありません。ましてや、自分一人の力ではとてもではありませんが出来ません。他の人にも頼むことが必要です。その際、時間管理はとても重要です。それに加え、外部の人間と

仕事をするので、余裕をもって仕事を進める必要があります。スムーズに進めるコツとして、自分の業務をこなすスピードを知ることです。これは、ひたすら業務をこなして、感覚を掴むしかないと思っています。

またレファレンスに関しても同じことが言えます。1年近くレファレンスをやってきましたが、そんな短期間で上達するものではありません。まだまだ、資料の知識も完璧でないため、ぴったりの回答が見いだせないことが多々あります。一人で悩んで回答が出なくても、利用者の時間をもったいないだけです。レファレンスを受けた時点で、私だけの問題ではないのです。そこで、利用者にレファレンスインタビューしたり、他の職員に相談したりすることが必要不可欠です。とにかく聞く。わからなければ先輩職員に尋ねる。そして、聞いた知識をしっかりと自分自身に叩き込んでいく。こうすることで、利用者の時間も節約しつつ、自分自身を磨き、次のレファレンスがスムーズにいくことになります。

以上が私の仕事内容と、日々感じていることです。図書館で働く司書は、ただ本とにらめっこして、本について考えていけば良い。そんな独りぼっちな職場と思っている人がいましたら、それは本当に一部の図書館のみです。司書は誰よりも周りの言葉に耳を澄ませ、積極的に外部と関わっていく。司書は「サービス業」なのです。まさに、コミュニケーション能力と積極性が問われる仕事です。ですので、「本が好き」だけでなく、「人も好き！」と思って司書になると、とても楽しいかもしれません。私自身、まだまだ未熟な部分がありますが、もっともっと本と人を好きになって、励んでいきたいと思っています。

## 東京都立多摩図書館

吉井 嘉奈子

私は2015年4月に、東京都立図書館に就職し、都立多摩図書館情報サービス係に配属になりました。今回、着任一年目について書く機会をいただきましたので、自分の仕事、そこから学んだことや身に着いた力、さらに今後への課題を説明したいと思います。

まず、私の職場と係について簡単に紹介いたします。東京都立図書館は、中央図書館と多摩図書館の二館があります。中央図書館は主に図書を扱っているのに対し、多摩図書館は、雑誌及び児童青少年資料を専門に扱っています。多摩図書館の情報サービス係は雑誌を用いたサービスを始めとする一般的なサービス（児童青少年サービスを除く）を担っています。「東京マガジンバンク」というサービス名称のもと、継続タイトルだけで6000タイトル、計17000タイトルの雑誌を所蔵しています。その雑誌を活かし、展示や講演会を行っています。また、雑誌を活用した効果的なレファレンスも模索しているところです。

都立多摩図書館は、2017年1月に移転します。そのため、現在は通常業務に加え、新図書館でのサービスや資料の配置の検討など、移転に関する業務も並行して行っています。

この一年で経験した業務としては、カウンターや電話での利用者対応のほか、毎朝の雑誌の排架、新着雑誌の点検といった情報サービス係職員共通の業務と各分掌の業務です。都立多摩図書館は都立中央図書館に比べ、職員の人数も少ないため、4月から様々な業務に携わることができました。その中でも代表的な仕事を以下で紹介します。

一つ目は電子資料に関する業務です。私の分掌の一つに、約30種類のオンラインデータベースを中心とした電子資料の管理があります。オンラインデータベースに不具合が生じたときに、利用者と職員に周知するとともに、都立中央図書館と連携して不具合解消の対応をするのが私の仕事です。また、新しく契約するデータベースの希望のとりまとめ、利用者用マニュアルの差し替え、ソーシャルメディアでのデータベースの紹介なども行っています。さらに、情報サービス係の共通業務として、オンラインデータベースの職員向け研修の講師も今年度は2回行い

ました。

この業務を通して、オンラインデータベースについての知識が深まり、利用者に対しても自信を持って案内できるようになりました。レファレンスで、利用者にとって適切なデータベースを紹介したこともあります。また、電子資料担当が都立多摩図書館では私一人ということもあり、責任と自覚を持って業務に臨んでいます。今後、もっと各データベースの理解を深め、他の職員にも伝えていきたいと思えます。

二つ目として、広報の業務を行っています。係で行っている展示やイベントについて、主に Facebook や Twitter で発信するための原稿を書いています。いかに簡潔な文章で、系の事業を PR できるかを考え、原稿を作成しています。原稿に添付する写真を撮影するのも私の仕事ですが、なるべく光の反射が入らないように注意しながら、見た人の興味を引くような写真を撮ることを心がけています。

よりよい広報をするために、今年度、広報についての講演会に自主的に参加しました。効果的な広報の方法を学ぶだけではなく、業務や図書館の将来を考えるうえで必要な知識を積極的に学ぶ姿勢も、広報の業務を通して得ることができました。

三つ目の主な仕事は、展示の仕事です。都立多摩図書館は、雑誌の創刊号を積極的に収集しています。それに関連し、今年度は「創刊号に見る昭和の時代」と題した常設展示を6つのテーマに分けて展示していました。私も、音楽雑誌の創刊号をテーマとした常設展示を行っていました。この展示をするにあたり、多くの方が協力してくださいました。展示についてアドバイスをもらった方もいれば、設営を手伝ってくださった方もいて、また、展示準備に専念できるように、と他の仕事を請け負ってくださった方もいました。このことから、仕事は自分一人ではできないものだというのを改めて学びました。

その結果完成した展示は、至らないところが多々あった展示ではありましたが、展示されている雑誌を手にとってくださる利用者が多くいて、ある利用者には「良い展示だ」とお褒めの言葉もいただきました。

常設展示の他、ミニ展示にも多く携わらせてもらっています。他の職員が企画したものを手伝うことが多いですが、自ら企画した展示もあります。大村智氏がノーベル医学生理学賞を受賞された日の翌日、大村氏のミニ展示を提案し、関連記事が掲載されている雑誌を集め、展示しました。都立多摩図書館では、思いついてすぐ実行に移すことができるので、タイムリーな話題の展示をすぐに行うことが可能だったのです。

ミニ展示を自分で企画するにあたり、与えられた仕事をただ受け身でやるのではなく、自分からできることを探して、提案、あるいは企画することの重要性と難しさを感じました。二年目以降も、攻める姿勢を忘れずに、業務に臨みたいと思えます。

最後に、私の今後の課題について述べていきます。今後の課題は三つあります。まず、雑誌についての知識を深めることです。どのようなジャンルにどのような雑誌があるのか、それぞれの特色は何なのか、といった知識はまだまだ身に着いていないのが現状です。新着雑誌の点検や、パスファインダーの作成を通して、雑誌への理解をもっと深めていきたいと思えます。そして、利用者が探しているような情報が載っている雑誌をレファレンスの際に提案できるようになりたいです。二つ目の課題は、新都立多摩図書館に向けての新しいサービスの提案です。これから、具体的なサービス内容を詰めていかなければなりません。その際に自分の得意な語学を活かせるような、また、若い年齢だからこその発想を基にするような、そんなサービスを考えていく必要があります。三つ目の課題は、もっと効率よく仕事をすることです。私は全ての仕事に対して、時間をかけすぎてしまう傾向にあるので、仕事の優先順位をつけ、これからどんどん増えていく課題をテキパキとこなせるように努力したいと思えます。

以上、私の司書としての一年目の経験について書かせていただきました。これからも様々な仕事を経験し、それを糧として司書としての能力を磨いていこうと思えます。

## 四條畷市立図書館

林 玲 花

平成27年4月より四條畷市立図書館で働き始めて一年ほどになります。この一年を振り返って、自分が取り組んでいる仕事や、日々感じていることについて報告させていただきます。

四條畷市の図書館は本館と分館1館があり、私は本館である四條畷図書館の配属になりました。四條畷市は人口約5万6千人の市で、どちらの図書館も規模が小さく、地域に密着したサービスを提供しています。職員数も少ないため、図書館の中に課ではなく、職員は担当を兼ねもちして業務にあたっています。担当するひとつひとつの仕事の量は少ないのですが、さまざまな業務に関わるので覚えることが多く、初めのうちは苦勞しました。

この仕事に就く以前に一年間地元の図書館で臨時職員をしていたときは、本や利用者に関わる仕事を主に経験しましたが、現在の職場では事務仕事をすることも多く、文書の管理や経理事務を分担して行っています。公文書や予算に関わる業務なので、市の職員として責任を持って正確に行うことを心がけています。この一年で経理関係の仕事に関わるようになり、図書館は市民の税金で運営しているのだと改めて感じました。

司書らしい仕事としては、毎日のカウンター当番やレファレンス、配架・書架整理、督促業務などを日常の仕事として行っています。こうした業務については、図書館によってやり方が異なるところもありますが、前職で経験していたのであまり戸惑うことはありませんでした。しかし、貸出や返却、督促などに関しては、当然図書館によってルールが異なります。まずはルールを把握して、すべての利用者に公平な対応ができるよう努めました。

資料や行事に関する業務は、奉仕対象で担当が分かれています。一般書担当と児童書担当の職員がおり、私は児童書担当となりました。児童書担当の主な仕事としては、児童書の選書や受け入れ、展示、おたよりの作成、おはなし会での読み聞かせ、幼稚園や保育所への出張おはなし会、ブックスタート、子ども向け行事の企画運営などがあります。選書に関しては、知識が少ない私にはできることは限られてしまうのですが、見計らいの本の中から購入するものを検討する選書会議に参加しています。読み聞かせは前職での経験がありましたが、保育所に出張に行ったり、ブックスタートで赤ちゃんに絵本を手渡したりと、カウンターやフロア以外でも子どもたちとふれあう機会が多くあり、そのたびに子どもを相手にする仕事の難しさを感じます。

また、児童書の担当となり、図書館の児童サービスにとってボランティアの方々のご存在がとても大きいということを実感しています。本館で月に3回開催するおはなし会のうち、2回をそれぞれ別のボランティア団体に依頼して協力していただいています。また、年に何度か開催する人形劇などのイベントも、人形劇団や個人の方に依頼して定期的に行うことができます。図書館が地域の方と子どもたちをつなぐ場になっているので、こうした連携をずっと続けていければと考えています。ボランティア団体の中でも、特に地域のおはなしの会さんと図書館との結びつきが長く続いています。一部の幼稚園・保育所へは図書館からおはなし会を申し職員が出かけていますが、図書館ではカバーできない幼稚園・保育所・小学校でのおはなし会などの活動を会の方が積極的にされています。図書館では、おはなし会で使われる本を提供したり、おはなし会で子どもに配るカードを作成したりして協力しています。

最近では、これまで述べてきた仕事のほかに、新しく始まった学校図書館支援の事業にも関わっています。モデル校の小学校一校から支援を進めており、新年度は他の小学校の図書室にも職員を配置する予定になっています。実際に図書室で業務を行うのは支援員ですが、どの小学校にどのような支援が必要なのか把握するために、各図書室の状況を調べています。学校によってコンピュータの導入状況や開室状況が異なり、図書室の仕事の一部を図書委員やPTAのボランティアが行うところもあるので、各学校に合わせた支援を考えていく必要があります。

また、支援員がスムーズに図書室の業務を始められるように、各学校共通のマニュアルを作成しているところです。

この一年、市の正規職員の司書として図書館で働き、これまで自分が思っていたよりも、図書館の運営にはさまざまな人々が関わっていることに気が付きました。図書館は出先機関ではありませんが、ブックスタートや証明書発行、イベントや市史関係の業務で他の部署と連携しています。学校支援に関しては、これまで行ってきた団体貸出や職場体験の受け入れだけでなく、学校図書館への支援でより深く関わっていくことになります。また、地域のボランティアの方や地元の企業、絵本作家の協力で、地域独自の取り組みができています。これからも、こうした連携を大切にして、地域に根ざした図書館づくりに努めていきたいと思っています。